

【2021 年度教職 FD プロジェクト報告】

研究テーマ

学校教育の現代的課題への取り組みと 教員養成に係る調査研究 1

－岡山理科大学附属高等学校・国際バカロレア教育から見えてくるもの－

研究代表者：橋本 雅子（短期大学部）

共同研究者：中本 和彦（法学部） 大西 俊弘（先端理工学部）

I はじめに

国際バカロレア（International Baccalaureate: IB）は、1968 年、チャレンジに満ちた総合的な教育プログラムとして、世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、生徒に対し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせるとともに、国際的に通用する大学入学資格（国際バカロレア資格）を与え、大学進学へのルートを確保することを目的として設置された。また、文部科学省においては、IB の導入拡大に向け、必要な教員の確保に向けた取組（外国人に対する特別免許状授与の促進等）、ディプロマ・プログラム（DP）の導入を促進するための教育課程の特例措置の新設、「国際バカロレア認定のための手引き」の作成・普及、国内の大学入試における IB の活用促進・IB に関する情報提供・発信等に取り組んでいる。

そこで、現在、認定校において実施されている共通カリキュラムの作成や、世界共通の国際バカロレア試験、国際バカロレア資格の授与等を研究し、今後の指導に活用することを目的に、岡山理科大学附属高等学校を訪問し、IB の研究ならびに実態調査を実施した。

なお、2020 年に学校訪問を計画していたが、コロナ禍の為訪問を見合わせ、岡山理科大学附属高等学校 IB 担当の教員によるオンライン講習会を実施した。

II 岡山理科大学附属高等学校国際バカロレア（IB）教育の概要

岡山理科大学附属高等学校国際バカロレア（IB）教育の目的は、「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良いより平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思

いやりに富んだ若者の育成」であり、これからの社会に対応できるスキルを身につけることができる教育として文部科学省にこのプログラム実施の申請を行った。混迷する世界経済、深刻化する地球環境問題、打ち続く宗教や民族間の紛争、日本を脅かす核ミサイルの配備等、国際的な課題は切実さを増し、一見平穏な私たちの日常生活にも影を落とし始めているなか、国際バカロレア教育にチャレンジし、国際的な視野を持って活躍できる人が育ってもらいたいと考えている。

1 コースの特色

①世界水準の全人教育プログラム

世界基準でバランスが取れたプログラムで、「平和とは?」「芸術とは?」のような問いについての議論や、検証的な探究、課題論文の作成、社会と関わる活動の実践などを通して学習するプログラム。

②21世紀の社会で求められるスキルを習得できる

コミュニケーションスキル、社会性スキル、思考スキル、自己管理スキル、リサーチスキルを高める学習プログラム。

③可能性の広がる進路

世界統一試験を受け、IB ディプロマを取得すると国内外の大学進学が有利になる。

2 カリキュラムと履修科目

1年次では、学習指導要領の必履修科目を探究型の授業で学ぶ。2年次の内容の先取りもある。2年次では、IB ディプロマ・プログラムとして、IB 独自の高校教育プログラム6科目とコア科目3つを履修する。世界基準のプログラムに沿ったカリキュラムを履修し、少人数クラスで、協働的学習を促す教育活動が行われる。3年次では、日本の高校卒業証書に加え、3年次11月の統一試験で基準を満たせば、IB 資格（フル・ディプロマ）を取得できる。

履修科目は、言語と文学、言語習得、個人と社会、理科、数学、芸術の6科目と次の3つコア科目に取り組む。①EE（Extended Essay）「課題論文」は、各自が研究課題設定し、調査分析し（リサーチ力）、論文を作成する。日本文は8000字以内、英語の場合は4000語以内を作成する。②TOK（Theory of Knowledge）「知の理論」は、「知識」とは何?「知っている」とはどういうことか?等、当然とされている主張に関して問い直す学習である。言語・文化・伝統の多様性を認識し、多角的、論理的思考力を育成（最低100時間の学習）する。③CAS（Creativity, Activity, Service）「創造性・行動・奉仕」は、教

室外の広い社会での経験や様々な人と共同作業により、協調性、思いやり、実践の大切さを学ぶ。以上の学習から自己管理スキルならびにコミュニケーションスキルを育成する。

Ⅲ 岡山理科大学附属高等学校国際バカロレア（IB）教育の実践 －「知の理論」／Theory of Knowledge（TOK）を事例として－

1 「知の理論」／Theory of Knowledge（TOK）の概要

2021 年 11 月 22 日（月）、岡山理科大学附属高等学校を訪問し、高校 1 年生の授業「IB 入門」と、2 年生の授業「知の理論」／Theory of Knowledge（TOK）を参観させてもらった。ここでは、2 年生の「知の理論」（以下、TOK とする。）について述べる。

この授業、TOK は、IB ディプロマ・プログラムのコア科目の一つであり、すべての生徒が受講しなければならないものである。その方法と目的は、以下の 6 つとなっている。

- 知識は流動的なもので、常に構築されつつあると認識する。
- 「知識とは何なのか」「何かを知っているというのは、どうやってわかるのか」など、知識について客観的に考える。
- 対話と議論により「知識に関する問い／Knowledge Question（KQ）」を探究する。
- 自分自身のものの見方を批判的に眺め、自分の信念や全体や価値観を認識し、それが自分の思想や行動にどう影響しているのかを知る。
- 他者の考えに耳を傾けて多様なものの見方に触れ、他者には世界がどのように見えているのかを考える。心を開く姿勢を養い、多様な文化を理解する。
- 知の生産、獲得、応用、伝達に関しての倫理や責任について考える。高校 2 年次には週 3 コマ、3 年次には週 2 コマで、計 110 時間以上を費やす。

ちょうど参観させてもらったときは、11 月 4 日に岡山理科大学生と他の IB 高校に対して TOK 展示（オンライン）をするための準備をしていた。

TOK 展示のための生徒が探究する問いは、33 の問い（IA プロンプト）が用意されており、例えば、「1. どのようなものが知識と見なされるのか。」「12. 知識の生産においてバイアスを避けることは不可能なのか。」「29. 知識を所有するのは誰か。」などがある。生徒は、その問いの中から 1 つを選び、3 つの事物を事例として取り上げて発表レポートを作成し、さらには発表のためのポスターを作成する。

この TOK 展示の評価については、「この展示は、私たちを取り巻く世界に TOK がど

のように顕在しているかを示すことに成功しているか。」という評価規準に対して、0～10を6段階に分けた評価基準が用意されている。9～10点の「非常に優れている」に該当する評価基準には、次のような4つが示されている。

- この展示は、3つの事物とそれらがもつ具体的な実社会の文脈を明確に特定している。
- 3つの事物それぞれについて、選択したIAプロンプトとのつながりを明らかにし、よく説明している。
- それぞれの事物がこの展示にもたらす特別な意義を効果的に正当化している。
- すべて、またはほぼすべての論点が適切なエビデンスによってしっかりと裏付けられており、かつ選択したIAプロンプトへの明確な言及がなされている。

このような評価規準・基準に基づいて、特に間違いを見るのではなく、よい点を取り上げて評価することとなっている。

2 「知の理論」／Theory of Knowledge (TOK) の実際

参観したときに説明してくれた2人の生徒の取り組みを紹介する。Aさんは、「18. 知ることのできないものは存在するか。」という問いについて探究していた。Aさんは、この問いに対して、「友だちの気持ち」「中3のときにつくったタペストリー」「プラネタリウム」の3つの事物を取り上げて、それぞれ人の心理、美の基準はわからないし人によって違う、技術の進歩によって知ろうと思っても限界がある、と論を展開させ、知ることができないものが存在する、と主張するレポートを作成していた。

Bさんは、「14. 知識によっては、特定の知る人のコミュニティーだけに帰属することがあるのだろうか。」という問いについて探究し、このクラスで最も早くポスターの作成に取り組んでいた。Bさんは、「(魔女狩りの絵が異なる) 遊戯王のカードデザイン」「『This is America』のミュージックビデオ」「Theatreでの『切腹』」の3つの事物を取り上げていた。「(魔女狩りの絵が異なる) 遊戯王のカードデザイン」では、日本で生まれた際のカードデザインは魔女狩りが



作成中のレポートを説明する A さん

表現されているが、海外に輸出された際にはタブー視され魔女狩りを示唆しないようにデザインが変更されており、文化的背景が知識の差異を呼び起こすことを、また「『This is America』のミュージックビデオ」では、このビデオは人種差別の見られるアメリカの実社会を映し出しているのだ



作成中のポスターを説明する B さん

が、日本で育った我々にはそのように解釈することが難しいということを、さらに「Theatre での『切腹』」では、「Theatre」の授業で扱った「切腹」について、海外と日本ではその受け止め方が異なることを、それぞれ説明し、それらを通して、知識によっては特定の知人のコミュニティだけに帰属することがある、ということを主張しようとしていた。

以上のように、答えのない問いの探究によって生徒たちは様々な知識を収集し、統合させながら知識を構築し、自己の主張を雄弁に語ってくれた。

IV 訪問を終えて

岡山理科大学附属高等学校の国際バカロレアコースの授業を見学し、短時間ではあったが授業にも参加して一番印象に残ったことは、生徒が熱心に授業に参加をし、作業や討論していることであった。日本の高等学校では 40 人学級が主流で、教師による講義形式の授業がほとんどで生徒は板書事項をひたすらノートを写す受け身型であることが多い。それに対して、国際バカロレアコースでは 10 名前後の少人数授業が大半であり、生徒は自ら調べてきたことを積極的に発表し、教員はそのサポート役に徹していた。欧米の学校教育のスタイルをそのまま踏襲しているといえ、文化的なギャップは感じるものの、この教育を 3 年間受ければ表現力や発信力は確かに身につくだろうと思わせるものであった。

関係者の話で一番印象に残ったことは、IB の申請から認定されるまでの大変さであった。岡山理科大学附属高等学校は、2016 年から申請の準備を始め、2017 年 9 月に岡山県内で初めて「国際バカロレア (IB) ディプロマプログラム (DP)」の候補校となった。2019 年 3 月に IB 機構の確認訪問があり、2019 年 3 月 22 日正式に「IBDP ワールドスクール」に認定された。日本の高等学校が国際バカロレアの認定校になるためには、学校教育法等関係法令（学習指導要領を含む）と国際バカロレア機構の定める教育課程の双方

を満たす必要がある。具体的には、国際バカロレアのカリキュラム内容と学習指導要領が定める各教科の内容とを比較し、不足する場合は学習指導要領が定める内容を補うなどして、教育課程を編成する必要がある。2015年よりIBと学習指導要領の双方を無理なく履修できるようにする特例措置ができ、日本語で履修できる教科が大幅に増えたとはいえ、英語で授業できる教員の確保は地方では難しいと想像する。授業を見学させていただいた教員が、博士の学位保持者であったのが印象的であった。また、教科内容だけでなく、設備面での認定条件も厳しく、理科室の設備を改修する必要があったとのことである。

今回視察することは出来なかったが、附属高等学校に隣接する岡山理科大学は2016年8月にIB教員養成の課程を認定されている。また、系列校の英数学館高等学校も2016年6月に「IBDP ワールドスクール」の認定を受けており、学校法人全体でIBに取り組んでいるといえる。他校との差別化という経営的な視点は当然あると思われるが、高等学校でIB教育を推進するにあたって隣接する大学から直接・間接のサポートを受けられるメリットは大きいと思われる。公立の高等学校でもIB校の指定を受けるところも出てきてはいるが、予算面・人材面の制約から学校数はそれほど増えてはいない。それに対して、私立学校では方針を定めて取り組みやすいと言えるが、今後クラス数を増やすなどの対応をとる場合には、少人数授業であるため授業料の値上げ等も必要になってくると思われる。

国際バカロレアでは、理想の学習者像を10個定義している。具体的には、①探究する人、②知識のある人、③考える人、④コミュニケーションが出来る人、⑤信念を持つ人、⑥心を開く人、⑦思いやりのある人、⑧挑戦する人、⑨バランスの取れた人、⑩振り返りができる人、であるが、日本の学校では①～③が強調され、④以下があまりないのと対照的であった。今回の訪問では、岡山理科大学附属高等学校の国際バカロレアコースでの3年間の教育で④～⑩の部分がどのように育成されるかまでは分からなかったが、数年後にまた訪問する機会があれば、その成果を確認したいと考えている。

【謝辞】

昨年度のオンラインでの研修会に引き続き、今年度は学校訪問・授業参観を受け入れてくださり、長時間にわたってご説明いただいた岡山理科大学附属高等学校のIB関係者に深く感謝いたします。